

良田平田遺跡

よしだひらたいせき

漆で書かれた記号



<3区>

【漆で書かれた“×”】

奈良時代の溝の底から出土した須恵器の中に珍しいものがありました。坏の底部外面に、漆で記号の“×”が書かれています。東隣の高住平田遺跡でも同じような須恵器が3点出土していますが、こちらはすべて蓋の外面に書かれています。



良田平田遺跡出土須恵器（坏）

漆で記号が書かれた須恵器は古墳時代後期（約1400年前）頃からあります。出土例の多い兵庫県北部では、奈良時代以降の集落跡で木製祭祀具とともに出土することがあるため、祭祀の場で使われた土器ではないかと推測されています。良田平田遺跡や高住平田遺跡では祭祀具と一緒に出土していませんが、同じ性格をもつ土器なのかもしれません。



高住平田遺跡出土須恵器（蓋）
漆で“×”が書かれた須恵器



【現地での発掘調査を終了！】

調査区北側でみつかった古墳時代中期（約1500年前）の川の跡を掘り上げて、今年5月から始まった現地での発掘調査を終了しました。

今回の発掘調査では、奈良～平安時代の田畠管理施設と考えられる掘立柱建物や溝の跡、木簡や古代役人のベルト金具といった様々な出土品など、貴重な発見がありました。

今後は発掘調査でみつかった大量の出土品の整理作業を進めていきます。また新しい発見があればホームページや発掘通信でみなさんにお知らせしますので、ご期待ください。



3区全景（北西から）

鳥取西道路の遺跡を掘る！

第32号 2011年12月22日

今年も、現場での発掘調査が終了しました。そこで、今回は発掘現場で働いていただいた作業員の方々にうかがった感想をご紹介します。



発掘調査の印象は？

- ・遺物が出てきたときが「すごい！」と思いました。古代に生きていた人がいたんだと改めて思いました。
→発掘調査で最初に遺物に触れるのは作業員の方々。いわば歴史の第一発見者になれるのは醍醐味といえるでしょう。
- ・どこまで掘っていいのかわからずに掘りすぎてしまったことが何回かあったので、難しかったです。
- ・きれいに掘り上がった時がうれしかった。
→土の違いに注意しながら掘っていきますので、大変だったのではないのでしょうか。その分、きれいに掘ることができると感動も大きかったのでしょうかね。
- ・作業は充実した内容だったが、夏の猛暑が印象に残っています。
- ・夏場の炎天下でかなり体力を消耗して、ぼててしまったこと。
→外での作業ですので、天候には勝てない？
- ・大変だったことよりも、好きな仕事をやっていることへの喜びの方が上でした。
→何度も調査に出させていただいて、発掘作業が好きになられたのでしょうか。うれしい限りです。



調査で働いていただいたみなさま、どうもありがとうございました。

(財)鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所
〒680-1133
鳥取市源太12番地
(旧鳥取湖陵高校美和分校内)
TEL: 0857-51-7553
FAX: 0857-51-7550
メールアドレス:
matsui@pref.tottori.jp

発掘通信

高住平田遺跡の調査も終わり、当財団の今年度の現地調査はすべて終了しました。本格的な雪の季節になる前に終わることができて、ほっとしています。これからは、現地調査の図面や写真、出土した遺物を整理して、昔のようすをさらに探っていきます。それでは、みなさま、よいお年を！

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

高住牛輪谷遺跡

たかすみ うしわだに いせき

古墳時代の
整地?



国土地理院1/25000地形図「鳥取南部」より

調査区の北端で砂や大きな石が混ざった土層がみつけられました。土は北側の谷へ向かって傾斜する地形を埋めるように確認されており、平坦地をつくるための整地と考えられます。周辺からは古墳時代後期(約1400～1500年前)の土器が出土しており、整地はその頃行われたのでしょうか。

調査範囲が狭いため、整地を行った目的はわかりませんが、周辺の調査が進めばそれが明らかになるかもしれません。



高住井手添遺跡

たかすみ いでぞえ いせき

利水と治水

現地での発掘調査を終了しました。最後まで調査を続けていた弥生時代中期(約2200～2100年前)の溝の中からは、木材や樹皮を組み合わせた構造物が確認され、水を利用する知恵と、水流による浸食から水路を守るための工夫のあとを読み取ることができます。

堰の構築順序は①から③の順に新しくなる



水路の中からみつけた木製構造物は、流れをさえぎるように構築されており、水路内の水をせき止めるための堰(せき)だと考えられます。破損したり、土砂などで堰が埋もれるたびに、新しい堰が造り直されており、周辺の土地を利用する上で重要な施設であったことがわかります。



カーブする水路の外側に、木材と樹皮を組み合わせた構造物が造られています。強く水が当たる部分の壁がえぐられないように防ぐことで、水路を管理していたのでしょうか。美しく弧を描いている構造物に弥生人の技術力をうかがうことができます。

高住平田遺跡

たかすみ ひらたに いせき

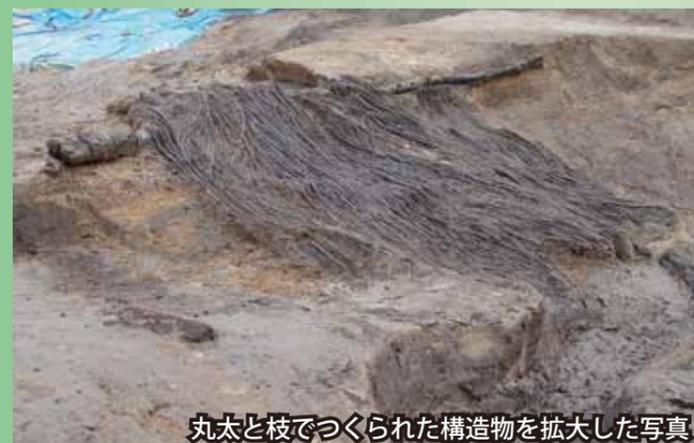
川の水を
利用する!



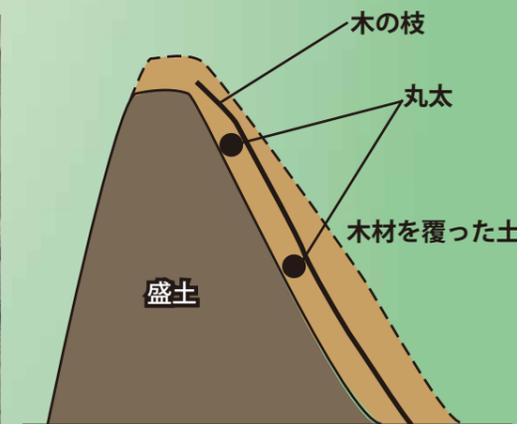
国土地理院1/25000地形図「鳥取南部」より

奈良～平安時代(約1300～900年前)に流れていた川の跡を調査していると、川の流れをさえぎるようにつくられた施設がみつけられました。川の水をせき止めて、水田などに引くための水を取った堰(せき)と思われるます。

この施設は土を盛り上げたところに丸太を横に並べて、その上に木の枝を敷き詰めていました。枝の上にはさらに土が乗せられていたようです。木の枝は、せき止めた川の水で堰の盛土が削られるのを防ぐために敷かれたのでしょうか。



丸太と枝でつくられた構造物を拡大した写真



堰の断面模式図